

蜜柑

芥川龍之介

青空文庫

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶って、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠え立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかわしい景色だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落していた。私は外套のポケットへじつと両手をつっこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見ようと云う元氣さえ起

らなかつた。

が、やがて発車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛くつろぎを感じながら、後の窓うしろ枠まどへ頭をもたせて、眼の前の停車場がずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたましい日和下駄ひよりげたの音が、改札口の方から聞え出したと思うと、間もなく車掌の何か云のい罵る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘が一人、慌あわただしく中へはいつて来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐おもむろに汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎつて行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤ばい煙えんの

中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、巻煙草まきたばこに火をつけながら、始めて懶い睞ものうまぶたをあげて、前の席に腰を下していた小娘の顔を一瞥べっした。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返いちようがえしに結つて、横なでの痕あとのある鞆ひびだらけの両頬ほおを氣持の悪い程赤く火照ほてらせた、如何いかにも田舎者いなかものらしい娘だつた。しかも垢あかじみた萌黄色もえぎいろの毛糸の襟えりまき巻まきがだらりと垂れ下つた膝ひざの上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしつかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さえも弁わきまえない愚鈍な心が

腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に變つて、刷すりの悪い何欄かの活字が意外な位鮮あざやかに私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧トンネル道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱ゆううつを慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切っていた。講和問題、新婦新郎、澆とくしよく職事件、死亡広告

——私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠さくぼくとした記事から記

事へ殆ほとん機械的に眼を通した。が、その間も勿もちろ論あの小娘が、あ
たかも卑俗な現実を人間にしたような面おも持ちで、私の前に坐つて
いる事を絶えず意識せずにはいられなかつた。この隧道の中の汽
車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋うづま
てる夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下
等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだら
なくなつて、読みかけた夕刊を抛ほうり出すと、又窓枠に頭を靠もたせな
がら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅おびされたような
心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時いつの間まにか例の小
娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻しきりに窓を開けようとして

いる。が、重い硝子戸ガラスは中々思うようにあがらないらしい。あの
軼ひびだらけの頬いよよは愈よよ赤くなつて、時々鼻涙はなをすすりこむ音が、小さ
な息の切れる声と一しよに、せわしなく耳へはいつて来る。これ
は勿論私にも、幾分ながら同情を惹ひくに足るものには相違なかつ
た。しかし汽車が今将まさに隧道の口へさしかかろうとしている事は、
暮色の中に枯草ばかり明あかるい両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来
たのでも、すぐに合点がてんの行く事であつた。にも関かからずこの小娘は、
わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私に
は呑のみこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気ま
ぐれだとか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として
険しい感情を蓄たくわえながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡もたげようと

して悪戦苦闘する容子ようすを、まるでそれが永久に成功しない事でも
 祈なるような冷酷な眼なで眺めていた。すると間もなく凄すさまじい音をは
 ためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けよう
 とした硝子戸は、とうとうばかりと下へ落ちた。そうしてその四
 角な穴の中から、煤すすを溶とかしたようななどす黒い空気が、俄にわかに息苦し
 い煙になつて、濛もうもう々と車内へ漲みなぎり出した。元来咽喉のどを害してい
 た私は、手巾ハンケチを顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせ
 られたおかげで、殆ほとんど息もつけない程咳せきこまなければならなかつ
 た。が、小娘は私に頓とんじやく着する気色けしきも見えず、窓から外へ首を
 のばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢びんの毛を戦そよがせながら、じつ
 と汽車の進む方向を見やっている。その姿を煤煙と電燈の光との

中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、そこから土の匂においや枯草の匂や水の匂ひややが冷かに流れこんで来なかつたなら、漸咳ようやくきやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道すべを迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟はさまれた、或貧しい町はずれの踏切りに通るかかっていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根わらやねや瓦屋根かわらがごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一いちりゆう 旒うのうす白い旗ものうが懶げに暮色ゆすを揺っていた。やつと隧道を出たと思う——その時その蕭しょう索さくとした踏切りの柵さくの向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つ

ているのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃そろつて背が低かつた。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一斉に手を挙あげるのが早いか、いたいけな喉のどを高く反そらせて、何とも意味の分らない喊かんせい声を一生懸命ほとばしに迸はらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢いきおいよく左右に振つたと思うと、忽たちまち心を躍おどらすばかり暖な日の色に染まっている蜜柑およが凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私は思わず息を呑のんだ。そうして刹那せつなに一切いっさいを了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴おもむこうとしている小娘は、その懐ふところ

に蔵していた幾顆いくかの蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落らんらくする鮮あざやかな蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬またたく暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗ほがらかな心もちが湧わき上つて来るのを意識した。私は昂然こうぜんと頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不あいかわらず変び鞞びだらけの頬を萌黄色の糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱かかえた手に、しっかりと三等切符を握っている。

.....

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして
又不可解な、下等な、退屈な人生をわずかに忘れる事が出来たのであ
る。

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年11月15日発行

1988（平成元）年5月30日46刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

蜜柑

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>